

文化芸術による復興推進員（福島県）

第2回連絡会議 要旨

日時：2月7日（木曜日）  
13:30～16:30

場所：福島県文化センター

出席者

（福島県推進員）	佐藤豊（福島県文化センター 岩崎推進員代理）
	江川和弥（（一社）ふくしま連携復興センター）
	川延安直（福島県立博物館）
	西 道典（南相馬市小中学校PTA連絡協議会）
（助言者）	渡辺一雄（文化芸術による復興推進コンソーシアム）
（運営委員）	荻原康子（（公社）企業メセナ協議会）
	小松弥生（全国美術館会議）
	松本辰明（（社）全国公立文化施設協会）
	本杉省三（日本大学）
（全国組織推進員）	佐藤李青（（公財）東京都歴史文化財団）
（文化庁）	土屋啓一（文化庁文化活動振興室）
（事務局）	大和滋・松野幹夫・伊藤美歩

開会の挨拶

1. 出席者紹介

2. 第1回復興推進員連絡会議から出た課題について 渡辺一雄アドバイザー

「第1回連絡会議において提起された課題の整理等について」参考メモを基に説明。配布資料には、○が岩手県、◎が宮城県、●が福島県の会議で発言されたもので、今日の議事、議題が効率的に進むようにと分類したものである。

・地域社会の復興

（1）行政施策に関するもの（2）被災者の生活の充実に関するもの（3）芸術鑑賞、祭りなど享受の機会に関するもの（4）地方自治体同士、企業との相互支援・連携に関するもの  
の4つに細分類できる。

・芸術文化活動の在り方

（1）芸術団体等による支援活動（2）市民による芸術文化活動（3）民俗芸能の保存、継承、記録保存の3つに細分類できる。

・文化施設に関するもの

・各自の活動分野により多様な内容であり、整理する上で「何を基準とするか」が困難であり、「復興推進における芸術文化の役割等」という共通のテーマを議論する上では、いくつかの基本的事項について共通理解が必要である。

・また、他の課題としては、以下の4つが挙げられる。

①震災以前からの課題が、被災を契機に顕在化したもの

②未曾有の規模の被災状況から、人間社会・文化の根本的在り様に問いかけるもの

③短期、中期、長期の時間軸で仕分けて検討すべきもの

④Feasibility（実現可能性）を基準に吟味すべきもの

上記が混然となっている→ 議論がかみ合うための前提事項が何か探る必要がある。

### 3. 被災地自治体の復興計画等に記載された文化芸術の復興に関する内容および協議

#### 佐藤（豊）

- ・福島県は文化センターと文化財の復旧が挙げられているが、他にも色々と事業として挙げられるものはあると思う。今後も長い目で復興を推進していくことが重要だ。

#### 川延

- ・各市町村の住民で、復興計画を認識している人は、ほとんどいないのではないかな。

#### 江川

- ・コミュニティの再形成をしなければならないという意味で、文化は大きいという認識は、どの市町村も持っているから、このような文面となっている。それに対して地元の住民には、余り認知されていないのではないかなと思う。この計画に、もっと市民が参画することや、コミュニティの再形成につながるように、つくり込むことが今後の課題である。また、今後我々がどうコミットメント（関わり合う）するのが大事である。

#### 西

- ・計画が沢山ありすぎて少々混乱するが、南相馬市では、文化を何とかしていこうという事業計画はあるようだ。先日も震災後初の神楽とか、伝統文化の発表会を開催した。

#### 大和

- ・福島県の場合は、特にコミュニティの形成において文化が重要であるとの認識が行政レベルであるということか。

#### 江川

- ・檜葉町や浪江町など住民の県外避難者が多い自治体は注目すべきだと思っている。檜葉は特に「ふるさと檜葉づくり」など町のイベント、祭典にかなり力を入れている。住民が戻ることが出来ない自治体が、メンタルな面でのコミュニティをつなぐことに力を注いでいる。今後、まちのアイデンティティをどのように形成していくかというところに文化を使った良い例だと思う。

#### 本杉

- ・東京や他の地域で福島の文化を享受できる点について、具体的にはどのような取り組みがあるのか。

#### 江川

- ・広域避難をしている子どもたちが再会するプロジェクトの広報を市町村がしている。我々もセーブ・ザ・チルドレンと組んで大熊町や檜葉町の人が東京で再会するプロジェクトを行っている。

#### 渡辺

- ・母子避難者に関する広報という点で、ほとんど情報が入ってこないと言っておられる方もいる。今、江川さんの話を聞いていて、ちょっと違和感を持った。

#### 江川

- ・ どのような関係ルートをとっているのかという問題点がある。私は、学校から被災した子どもたちに繋がるルートや行政から被災者の方につながるルートを活用している。地域のNPOとご家庭を直接つなぐルートはない。我々は、全国のNPO等と連携しながら、仲介に入り、様々なNPOの支援活動の情報を行政経由で各家庭へ流すことを模索している。
- ・ 最近、避難者が原発賠償でお金をもらっているから仕事に就こうとしないとか、彼らに助けは要らない等と誤解された情報が耳に入る。母子避難者だと、経済的にも困窮しており支援が必要なのは明確である。母子避難が長期化すると虐待が生まれる等、様々な問題も危惧される。助けるためには福島県の我々のみではなく、東京にあるコミュニティも必要とされる。それぞれがお互いにつながる突破口を見つけたい。我々が地域の側での窓口となり、東京のどこの団体がオーソライズ（公認）されて対応できるかという情報が知りたい。

#### 大和

- ・ 南相馬では、だいぶ繋がりが戻ってきていると聞いているが。

#### 西

- ・ しかし、小中学校で全体の60%は、子ども達が戻って来ていない。私は、現在、戻って来て一緒に生きていける場所がありますよというスタンスで呼びかけている。県外に出ている人の様子を聞くと、福島県は全くだめだという認識が強いために、情報が入って来にくいという面もある。

#### 大和

- ・ 前回の会議でも放射線に対する認識の違いでコミュニティが分断してしまうという問題は出ていた。まずは、集団避難をしている人たちの文化の問題をどうするかという事がある。

#### 川延

- ・ この復興計画のまとめを見ると作成しているのは、教育委員会であると思われる。そこでは、今、出ていたような文化に対する問題を解決できる策は、無いであろう。その辺をコンソーシアムで触れていくというのであれば、そういう方法もあるし、コミュニティの分断を超えるようなテーマを作り上げようというのであれば、そういうやり方もあると思う。

#### 渡辺

- ・ 昔の東京は、各地から出てきた人たちが集まった街だった。だから昭和40年代、50年代は、ふるさと祭りと呼んで自主的にイベントを行う形態が見られた。そういうことが実現できる条件整備について江川さんに質問したい。

#### 江川

- ・ 避難先の子どものと大熊町から避難した子どもと一緒に遊ばせるプロジェクトを、あえて「避難者」という言葉を使わずに行っている。情報発信は、避難者ルートと地域の子どものルートと両方に行く。しかし、表向きは、別々に呼びかけているように見せない。福島県立博物館のプロジェクトもそこが優れているところで、結果的に会津の文化も知っていただいたり、アートも知っていただいたりというところを、両方の参加者を入れてコミュニティとして繋いでいる。
- ・ 避難した子どもたちは、校外のアートのプログラムで初めて会津の子どもたちと知り合っただけで仲よくなれる。そうすると、仮設を出て遊べる友達が出来てくる。

- ・同じような仕掛けが東京の東雲にも必要であり、東京の子どもと福島の子どもが一緒に遊べるプロジェクトがあるのだろうか。もしあれば問題ないが、無ければ、つなぐようなプロジェクトが、仕掛けとして出来ると思う。

#### 川延

- ・週末アートスクールは、東京都と立ち上げてきたプロジェクトであるが、受入側も、やって来たアーティストもそれぞれがプライドを持っているので、慰問に来ました的なものではなく、伝え方を工夫している。今後は、仮設住宅で行うプロジェクトでも近隣の方たちにも来てもらえるような仕組みをつくっていかないと、逆差別的なことになってしまう。

#### 江川

- ・会津若松市で大熊町の子ども達と会津の子ども達と一緒に遊べる 10 日間のプログラムを行った際には、募集のルートを会津若松市の教育委員会と大熊小学校にするだけでよかった。それは、東雲でも同じだと思う。最近、「転校してきた皆さん、もっと東雲を知ってください」というプロジェクトでもよい。その結果、福島の子どもではないとしても、最近転校してきた子が東京のコミュニティに入れればよいし、そういう情報発信を意図的に丁寧に行うことで繋がりを生むと思う。

#### 大和

- ・福島県文化センターも飯舘村文化祭の後、浪江町などでも行事を行っているのか。

#### 佐藤（豊）

- ・飯舘村文化祭では、おじいちゃん、おばあちゃんが手づくりで創ったものや、絵などを展示して、飯舘村の人も福島市の人も呼べるイベントとした。大熊町と浪江町は住民説明会をここ（福島県文化センター）で行い、そこからコミュニティが広がりつつある。

#### 大和

- ・いわき市なども様々な地域からの住民が増えて新しい地域のアイデンティティづくりとなっている。一方で南相馬市では、地域のアイデンティティをいかに保持していくかというテーマになってくると思うが。

#### 西

- ・アイデンティティまでいなくても、例えば浪江町には裸祭りがあるなど、各被災地では、それぞれの活動をしている。もっと手伝いたいが、自分のところで手一杯で何も出来ない状況だ。
- ・また、南相馬市にも「ARTS for HOPE」や民俗芸能の団体などの出張所も出来ている。仮設ごとの集会所を回りながら手芸や絵の活動を行っている。
- ・南相馬市には「ゆめはっと」という財団が運営する文化会館がある。私は財団の評議委員も務めており、その情報では、会館の運営が出来なかった期間に東京電力から賠償金を頂いている。このお金を市民に還元する目的で、H25年度のプログラムを計画しており、歌舞伎など大きな出し物から仮設住宅を丹念に回って出来る活動まで検討している。そういう所とのコーディネートをコンソーシアムには行って欲しい。

#### 渡辺

- ・その賠償金は、どういう仕掛けで活動に充てるのか。

#### 西

- ・30 キロ圏内までは、過去3年間で一番収益のあった時をベースに算出し、現在の収益との差額が計上される。計上された金額は財団で基金をつくり活動資金とする。来年以降は、補助金もないため、自分たちの財源で活動を行う。

#### 大和

- ・これまでの報告で東京都は、様々な事業を一緒に取り組んでいる。

#### 佐藤（李）

- ・週末アートスクールというプログラムは、自分たちでも良い活動だったと実感しているが、なかなか外に伝わらないことが課題だと思っていたので、今、江川さんの話を聞いて伝わっているということを実感した。
- ・復興計画が、教育委員会で作成されたという話も気になった。全国会議でも申し上げたが、どの所管の人が作成しているかによって、結局、今までの復旧なのか、震災の中で新たに増えてきたことの復興として政策を位置づけるのかが、変わってくると思う。それは文化という部署の中だけで議論することではなく、もっとまち全体でどういうふうを考えていくのかということ、文化を切り口に考えていけるということを感じた。

#### 本杉

- ・今の話を受け、誰が作成したかによって違ったものになるという点は納得が出来る。ただ、全体を教育委員会で作成しているわけではなく、文化に関しての部分であると思うので、全体を寄せ集めてきて編集する作業でどのような人が関わっているのかも大事だと思う。

#### 松野

- ・窓口は各自治体の総務課とか企画室というところが所管している。教育委員会にまで文化の部分を作成させたところと、そうでない所の差は出ていると思う。また、総合計画に準じて作成している所が多いという印象も受ける。復興計画に記載されていない場合でも、復興予算を使うことは可能なのか。

#### 江川

- ・復興計画に入っていないなくても、自治体が予算を使うことは可能である。被災者教育というプロジェクトを、我々NPOと大熊町が組んで行っているが復興計画云々の問題ではなく、必要性に応じて出来ている。
- ・行政からすると、計画に入れるとやらなければならない。行政のマンパワーが落ちているところは、計画をつくらないで避ける。特に文化は避けられる傾向があるにもかかわらず、避難地域では、敢えて将来大変なのに計画をつくっているのがすごいと思う。

#### 大和

- ・コミュニティ形成の上で文化芸術が重要だという認識をコンソーシアムの調査研究の中でまとめたいと思う。しかし、自治体によって書かれ方の姿勢も違い、どういう切り口で検証していくかは、今後の課題である。

#### 川延

- ・復興予算を使うにあたり、目に見える形での成果は求められるだろう。先ほど出されたNPO 同士の連携などの事業は、旅費が多く計上されてしまうため認められにくい。文化財レスキューや伝統芸能の復興とリンクする方法もある。
- ・この復興計画一覧表をみて、川内村と大熊町は素直だと思う。川内村は帰ることを表明し

たが、ほとんどの人が帰らない。大熊町も皆が帰ることが難しい。

#### 江川

・ハードの事業は出来ないため、ソフトに対する事業をしっかりと行うことが問われているが、マンパワーを考えたら記載なしになってしまうだろう。

#### 西

・今度の復興予算で浜通り地区には、縦割りをなくして自由に使っていい予算がついた。しかし、NPO では申請ができないため、市町村を動かす準備をしなくてはならない。

#### 荻原

・福島県は分断されたものをどう繋げて新しいコミュニティとするか、また、繋げるためには、文化の力が有効であるということ、取組で知らせていく必要がある。

・GB Fund ではARTS for HOPE や東北クラフトなどのコミュニティを繋ぐ活動に支援金を出しているが、支援している企業の側でも、もっと他にも出来ることを探している。情報が伝わっていなかったり、接点がなかったりで、つながりをどう作るのかで出来ることはまだあると思う。

#### 小松

・復興計画についてコンソーシアムで分析をしてメッセージを出しても、それを誰が受けとめるのかという問題があり、今、聞いた問題点や実情をまとめて、その先に繋げるためにはどうしたらよいかということを考えたいと思う。

・コンソーシアム自身はお金を持っていない。手段も余りない。しかし、参加しているメンバーがそれぞれ力を持っているので、メセナ協議会ではもっとこういう情報を流していかうとか、文化庁では新しい予算で、被災地から移住してきていらっしゃる方を援助しようとか、文化会館ではこういうことができる等と考えていくところに繋がればよい。

#### 松本

・避難生活を余儀なくされている方々は、避難先とふるさととの繋がりの方を持っており、受入側自治体とふるさとの取組の両方を押さえていく必要がある。

・復興計画の中に避難生活を送っている方々を鑑みた計画や支援はあるのかと思うが、受け入れをしている自治体側にもその計画を連携していく必要がある。

・文化施設の協働については、今後も考えていきたい。

### 4. 文化芸術による復興推進活動としてふさわしい事例についての意見交換

#### 大和

・コミュニティと文化についての議論が深まっているが、ここからは復興に関わっている方々が共有できるような事例について協議をしたい。

#### 事例についての資料を説明

#### 川延

・東京都の動きが非常に早く、6月7月くらいには中通り、浜通り、会津という区分を意識して事業を始めることが出来た。その中で会津の事業として、中通り、浜通りから会津に気軽に来るきっかけを目的に「週末アートスクール」が始まった。会津で活動することは、すなわち過疎地での活動を意味する。もともと人口流出、高齢化が進んでいる場所で、そ

ここに他の地域の方々が来ると地元の人としてはモチベーションが上がる。何よりも、地元だけで完結するのではなく様々なアーティストに入っていただくため、そのアーティストの方々が福島や会津のことを知り、全国に発信してもらえる。アーティストも地域の文化財や伝統行事、食材に触れ、新たな創造にも結びつく。

#### 江川

- ・大熊町の子どもたちに学童保育を行っているが、子どもたちの気持ちを絵にする講座は、子ども達がとても集中していた。特に幼い子どもは、言葉で表現できないものをアートで表現でき、そういうプロジェクトも福島にたくさん持ち込んでほしいと思った。
- ・被災した子どもたちや若者たちが受身の立場ではなく、能動的に参加できる企画を模索している。プロジェクトを高校生が主体となって出来ないだろうかと考えていて、ファシリテートは東京のNPOと連携しながらやっていきたい。

#### 西

- ・富山県の南砺市で大きな風船をつくる祭を今週末に行う。南相馬市の中学校美術部と生徒会に絵を描いてもらい、向こうの子どもたちとの交流も企画している。
- ・全国の子どもたちを交流させる目的で、全国雪合戦大会を行う。子どもたちと様々な人との交流を目的に、子どもたちを様々な所に連れて行きたい。保養のみが目的ではなく様々な人の話を聞く。また、南相馬の状況を発信させたい。
- ・中学校と小学校5・6年生に学校を通してアンケートを実施した。内容は、相馬に将来住みたいか、どういう相馬が好きかなど。子どもたちが住める、住みたい地区を、子どもたちの意見を聞きながら考えていきたい。

#### 佐藤（豊）

- ・文化庁の「心の復興事業」の取組の中で「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」を実施している。子ども達が芸術を鑑賞した際の安らぎの時間、また、公演が終わってからの交流会での繋がりも出来、本当に良い事業だった。

#### 大和

- ・それぞれの活動をしていく中で、人員的な配慮はどうしているのか。

#### 西

- ・ウェブの作成や電話での受付などは、私が全て行うのではパンクしてしまうため、地域外の方をお願いしている。

#### 川延

- ・我々の博物館で行うのは、コーディネートに特化している。東京都との事業の場合でも全て企画をつくるとか、持ち込みの企画を受けるとかではなく、地域のNPOやアーティストをつなぐという部分を行っている。

#### 本杉

- ・1つ1つの活動毎に協力している人が違うのかを西さんに伺いたい。話を聞いていると、非常に活動が広がっている感じがする。

#### 西

- ・1年目は全て私が窓口となっていたが、去年は数が多くなり過ぎてしまい、補助金申請の担当など、分担できる部分を周りをお願いし、プログラムを、受けるか受けないかを最終

的に自分で判断している。市が窓口となったものは、30プログラム位あったが、全て私から学校を通し最終的に確定した後に、市で説明会を開き添乗員を付けるなどした。自分は、南相馬での取りまとめに徹しているため、付き添うことはあまりせず、川延さんと同じようにコーディネートに徹している。

#### 大和

- ・川延さんから以前伺っていた『黒塚』についての進捗状況を伺いたい。

#### 川延

- ・福島大学の渡辺准教授が福島現代美術ビエンナーレを行っている。今年は福島空港で開催され、再来年の開催地を今、模索しているが会津でやってはどうかという話が出ている。これは、以前にダンサーの平山素子さんの公演を会津若松の市民会館と福島大学の協力で県立博物館で行った経緯があり、ネットワークが既にできている。そろそろ福島で受け入れるのではなく福島発のイベントを行いたいということで、計画している。「黒塚」は福島の中通りが舞台の鬼婆伝説でローカルな場所と中央の対立構造や非常に今の福島の状態を思わせるお話である。そのテーマを全国的に活躍なさっている方たちとつくり上げ、さらに東京にも持って行って見てもらえればという構想である。しかし、資金の目途などが全く立っておらず、2年後の開催の前段階として、今年は、文化庁の助成金と風雅堂の自主財源のダンスワークショップなどで市民に浸透させることを考えている。最終的には何とか予算獲得を目指して舞台化をねらいたい。

#### 小松

- ・東京は、どこで行いたいという目処はあるのか。

#### 川延

- ・まだ、そこまで考えていないが客席が200～300くらいの劇場が良いのではないかと思う。

#### 小松

- ・例えば公文協で、東京都内で一緒にやろうというところと組んで、行うのはどうか。震災の年に地方でつくられたものを新国立劇場で演ずるという企画があり、多分今でもやっている。

#### 松本

- ・共同事業だったら、一緒に制作することや、提案は出来ると思う。ある程度具体的な企画書が出来たら、ぜひ頂きたい。また、各会館に呼びかけも行いたい。

#### 大和

- ・未来に向けての一つの可能性を含めた議論が出たところで時間となった。今日出ていた提案を整理し、また確認を改めてお願いしたい。

終了